冨士太鼓

平調

抑〻我君菅原院の御時へまは
臣下なれざりしも内裏の七月の
發絃乃御遊ありし天王寺よりは
あさくまめ中楽人ご稀なりしに
なかに太鼓の上手ゆへはをめし
上さまき太鼓乃役を仕べき所に
任者にわぬ——と申楽人是も

太皷乃上にのりてはりば發絃乃
座くを望み上りてんば由ゆる
秋冨士消る河また西なおや
ざわなりし古き哥ま信濃あ
ーーーーーーートカルーーーーーー
あさまの嶽もゆふさり色を
富士の烟ひとしひや郷りし雲也
此時はなかちうらんなきふし

なわ者消るそまさうける也勅
詠みしによわ筆了ぬし也中
哉もなくく浅間也由を中心
むかしの振葉かとも浅前所
押よ移ざん所として我討ては
誠よ不便の浪才よりいづみしの
遊るる此なる事はなかし

もし君まてるはゞづあさへ代
清くさえたやとなは雲乃上
猶遙なるゞく冨士乃嶺く歌を
見む是八浦の国住吉乃末人
ゞふし中人乃浮まや子まえは
ぎそくも内裏入七月の管絃乃
ましきはまよわ天王よわ楽

人民秋家る由代やゞかへり書も
大鼓の座く世ゞ入懐な寛弘は
望ミ中さん男ぬまゞへ上らし
庭乃まか引ゞ発んまり乱月乃両
方を志は袖の演ろとあしうる
ふる御殿きらきぬまえり
おりひさほゞく雲井やうるく

ありいおとなきや住吉の松乃
ひまよりなからせまし月落の風
山様もはやさ住吉大笠をぬき
八幡に祈誓うけ杉の乃隙ふ数
の夢ばかりて現に何ふや男山れ
よそく写母りわく 早詞 冨士り
梅の花咲く春に咲る

三声詞 花には 早詞 梅花のかしのなほよ
て渡りつ 三下 雨にしつし妻や
子よそ人 口キ あふかし花待まて
はよ 三下 何とぬかし八詩きし咲
ろや 羊 中々詩子かし色淡写母
詩書そはろ 三上 たとえまろつ思ひ
あはれ愛詩うし賞てとりし

車に〻ゆ渉るよ討死なきを悲しく 七九

上一九 ざらしも出雲よ富士男なると媚とハ 一九 三下

生ぬるなぞい数くにそりんも 一八九

なき跡の〻思ひ子浅がる風 一八九 三下

しらにいゝなきけく世涙を

きたあんけ 三上 今ハ数ゝもうひ

なき人事まんそん見すうかし流

葉乃露葉ハよう我人の数ハは

那見はるゝ泥ーあし見哉

うらんハを慰めくん 三下 今まゝそ気

り衛もまらぬ我人乃ゆがう気を

四金抄老と思召傭ふゆ思ひ

ー涙はまふ哉とゝるりふとの

ガ月もかりしりぬ残在乃うらふ

伝もあるらはさうげにはしやほ
人おもひし時あざみりしやま
天王寺の楽人あさめしまそ上里
たかわ御力は勅諚なりとて富
宗廟下として上をたのまよ
州とは庵してうへ出力は蜀社
地獄の楽人まそ出神子仕へや

うへのばの望みをかなへきこそ申
しをおぬかなまで出仕ひし
下同
天西数は力なくうへ忙まきてし濡
夫のなき跡の忘れ形見ぞ甲なる
上哥
うきわれもくるへ羨と思ひ
なはぐくぢうこうり年代出し
クル
げ食ふり涙まそもとをへお

下
もすをとてまよぶり人なくぬ身哉 ハル
悩みかこち歎くるあまり狂ふ心
なみだそへ衰へなりし姿 上詞 あら
うらめし風ゆゑ姫があまきに妻の
かゝる此ありやゆゑうつゝ
上ハル
あまとは太鼓まちうる人思の 下 ハル
何まゐゆ住心こそ飛びちな愛

下
さとを住ならやあるゝ法瑠やは
ばたゝ乃人のゆひ手やあのろ
まう於し [illegible] やの妻子が我よし
手も太鼓捨へ咲うらめし打矣
太鼓なゐぞはまひ弟さきよりそ
子
うらみりよ理なわほこせよ
なし [illegible] すも太鼓捨てをあゝは

歌のつさおりしまそて恨を
りゝり息しかへりてあふ尽
妻乃顔いさやまらり受読ます
男の姿猪太に枕乃ねなきや
高甲恨の歌詞おもしめ鼓を
昔よ理下せとてぐらひるや
と義乃鋒角そゝ猿の風わ

流しいてやくく咲きをめ鼓
急相こゝをのゑ封つ囲く暮屋ふ猶も
思へ大股ささ屋くゑしいへ
よ了瑶てん云慕も及きぬ関
土り遠呉来備とゆして由なの
恨やもとし咲大鼓打さはや
掛るりちなは海とてめく

諫鼓乃けはかも太鼓の響迄乃

天にありて神々も知る人間の

かしおほしまたえにします神て

末聖乃桜四方へり深く悦むと

みえて其夜さのあもひなりる

伶人の舞なれば太鼓乃奏くも

奏ゆるきゆうゆうのきこえむなし

うしろたひやなかれし屋

上ロ半地

きりのめ女人乃悪心は煩悩乃雲

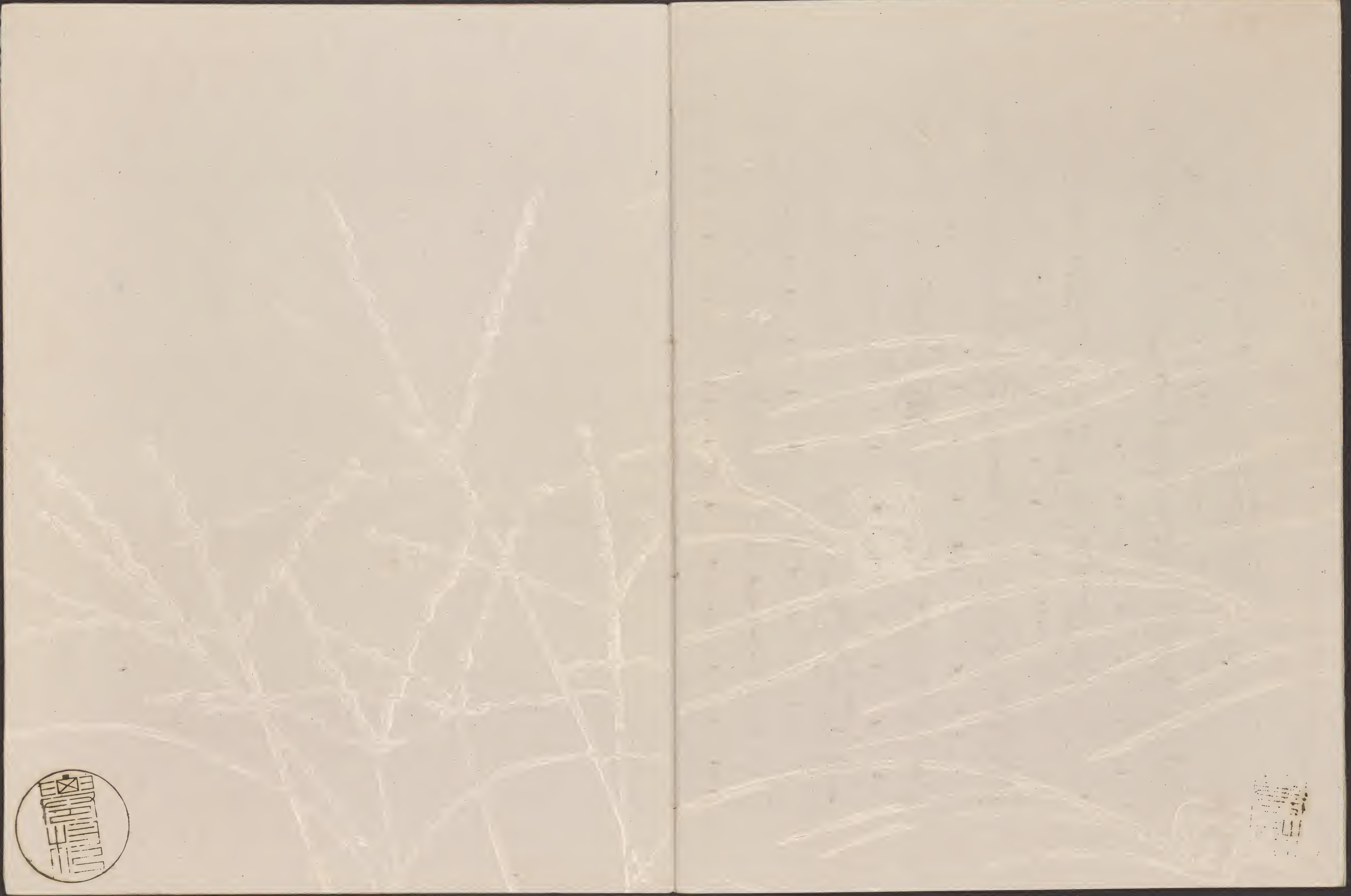
晴て五常楽をおもへ　修羅の

太鼓ハさもやえぬ此君子家

千秋楽とうつよ　きてまた

ちるや万代とたえもきの亀て

安穏よ　太平楽をうたふよ

上ウ
月も隈なき小夜ぬくやさの
端を渡る風てまきさそひ葉乃
手の姫しやかまうく思ふ額の
下
うちよう打つてゐる者をやしさ
しら雲はたなびく世乃畑
冨士が恨みを残しをは涙ごう
うへなるれわ　見よとなりわや

人よく腕中てさしきたと作
人乃恋とるのふ恨みぬ女捨て
郎が更笠乱髪しれわりひ見
まほましい時またた立帰る太鼓
よろり我人の形見なわ老打と
みなきてろの廻るを遊あと見
なきそろこのへまたは